

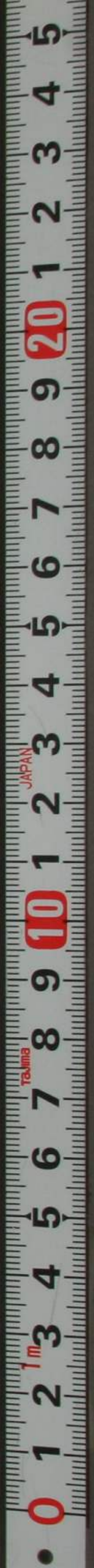


甲
八犬傳

第七輯

卷之貳

13
709
33



門遠 13
號 709
卷 33



明治 三六年
十月 九日
購 未

南總里見八犬傳第七輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第六十四回

現八單身のく衆悪と戦ふ
縁連牙二郎信道を逐ふ

却説赤岩二角ハ縁連を首とく大約五名の塾生ホの會現八ハ擊伏
ら且一を媚く恙る氣色る又現八を欺待を程ハ夜ハやるくハ深初く
既ハ人定ハありハ客ハありハ酔ハありハ中ハ現八ハ素ハ酒量ハ
之とくハ血を推辞ハけ且ハ二角ハ其意ハ任ハ童扈從と呼
近ハ盃盤を納ハく又如此々々一分付ハ果ハ退ハ客房ハ屏風
建達ハ現八ハ臥簟を儲ハ云云と鞍ハ二角ハ其をハ安ハ犬飼ハ
さぞ疲勞ハひけとく退ハ睡ハ更籠山生ハ家族ハ同ト牙二郎ハ子舎ハ

八犬傳 第七卷之三

南總里見八犬傳

至る共侶の寝るものよん思老も臥房の入りて死ゆといふ現八席をさうらう。
 ありと并ぬ衆人ふよるを述別を告ぐ童唐徒引まゐる客房を退苑
 け。牙二郎を自送りて父のやとり人脚を進り大人の心を弱く嚮ふ某を
 禁めぬひる京より西の幸ねども関東の武藝をひて大人の右の出るの
 ありとも覚ぬ高弟達の現八の撃手伏らざる外に見て還る彼奴と答ふひの
 抑甚麼なるころも是より當家の武名降らば弟子も亦必離まて朽を死
 るのふこそと敦固悍く怒ぶれに二角呵々とら笑ひてその和主ホが知るころも
 かうよくあつて彼現八が武勇藝術麓山ふも捷と難を然るを和主が
 出さういよく後まをさるとわぶ五も亦見てとれど推捕箆を敷ふ至らば
 縦現八を敷捕ともふも傷人言かす。これこの義をいふとて些も色ふ
 頭さで感服する体ふとる。由断さうと熟睡を窺ひ結果まふ人を得

志すむすのら心はるむや。このふ牙二郎有理と曉す。又いふうもあうむ
 けり。登時船虫の屏風の背より立出く良人の身邊に進む近つ死妾の嚮ふ
 腹のま立く抗も蒐まほりうと。せ仗の深念の格別るさむり手
 軽きるのり。皆虚々々々をさうら撃捕る準備とあふむやといふ縁連
 眼を睜めて縦宿鳥を刺とも彼奴が武藝の悔り。尙敷漏まを倚り措て
 後悔その詮るるべし。出口々々の一兩人埋伏せんと肝要さうらといふ飛伴太
 濃太郎東太團吾も兪領まき。かふ臥房の出口の白樽まを倚り措て
 走り出んとまると死に跌き輾かを敷てまよれといふ船虫含笑さうら手配の
 するところ。か海漏と謀らんぬ庭の繩を引渡す。二重も三重も準備を
 よくせが檻の獸笥の鳥逃とも脱しめせと。助言ふ牙二郎勇立く。然るが
 三過る比潛びよて寝首を捕ん欽火事わと呼りて慌忙起きんとまを

摠蒐アホと撃つ死状と向を一角使あむ閑暇無事の時さう寝首を
 捕らるるもあつら渠今大敵の中ありいそふ熟睡をせ死又火事めと
 呼らんその声鄰へ傳へるが四鄰の人々走聚る妨あるともあべし所詮五人も
 十人も三四隔の捕籠る盗賊入のぬと呼懸々々起んとするを撃つまは且然
 あつちやと誇負の左右を佐と見え且衆皆齊二感服しるその中縁連も
 うち合笑の声を潜り仰寔の理り某が腹心の若輩尾江内といふ
 のあり又奴隷の墓内といふのあり西人俱の心悍くう所行を歡べり是回も
 供の將と来しと渠ホと加勢をせぬか身方八人あて現八も武
 勇小蘭と三面の臂のりぬとも撃漏れとあつちやと彼奴を殺す捕らるる
 首級を某小使う。自井の城へ齎して主君長尾殿におわす道中某の
 驛ゆく強偷教人ち入りて御大刀を奪め走り去るを某透さ追鬼と

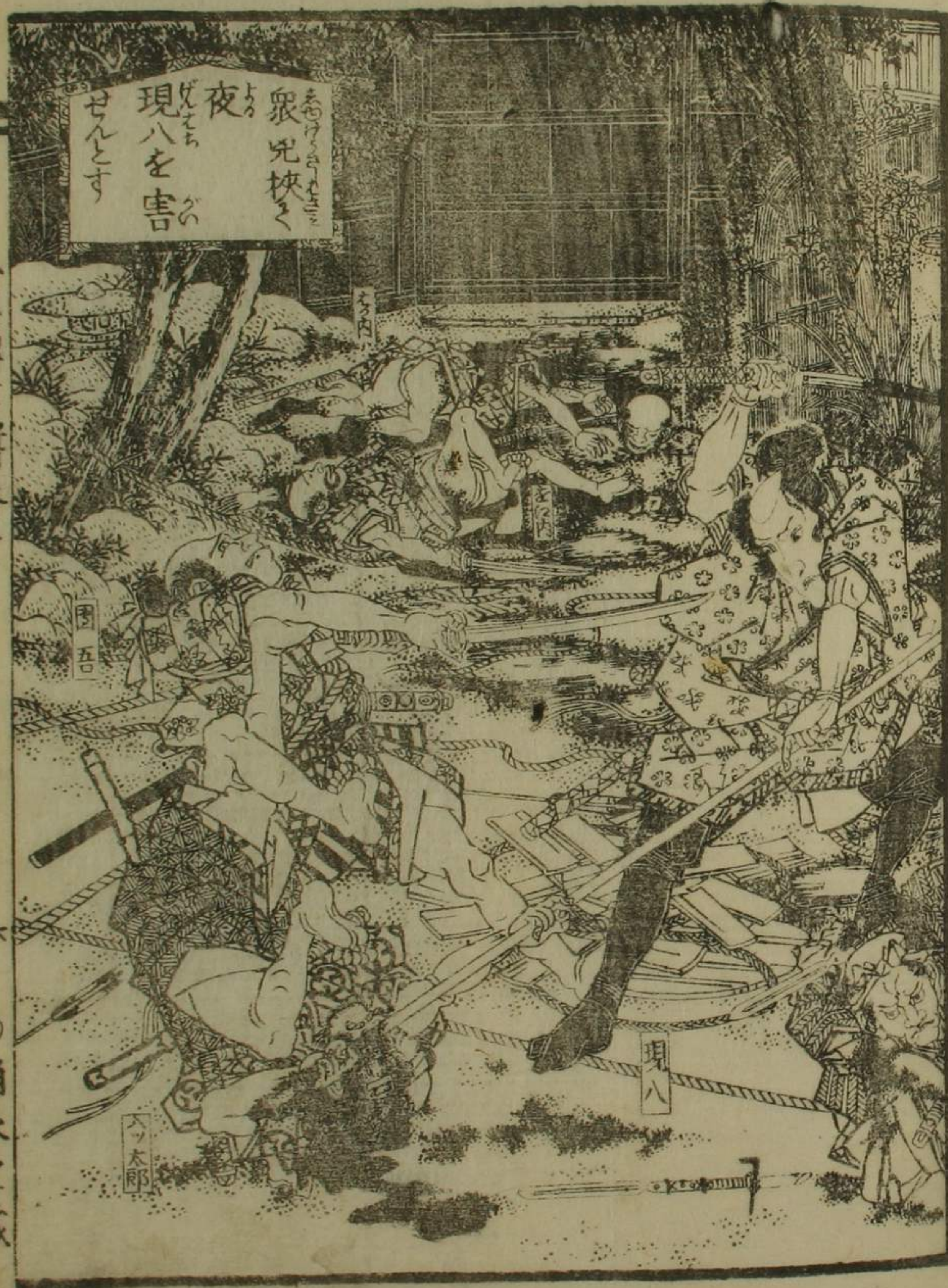
頭立一人を矢庭の撃つ出ひとも先を逃亡くふらび追へとも遂め及ぶ
 既御大刀を失ひてあつちや一解死すのわけと縛相違の死證を七小賊の首
 級を齎しとつとせえわが奉ら縦罪科と被るも五十日秋百目で許さべし
 この誤いといふと長けが衆皆亦復感佩し龍山や説得く妙え介ら左せん
 右せよと夫も長く手配の商量小夜深み有然程ぬ大飼現八も客房
 赴く既臥臥筆小入りつらも肚裡ぬぬやうさうも赤岩一角の頼切る弟子ホの
 遺言くは小撃伏られを聊怒る氣色もいふく日を款待するその奸詐
 測るべし且渠が左の眼の矢傷の昨宵庚申山ぬて平く日射られを童家
 射を教るとく不憶く筈の飛返りて眼を傷ら且つらうその本性を妻ぬも子
 めも隠れが所以の食言さうさうらかの折ぬ彼奴はこれ認め仇ある
 よを知らしむ昨宵真の一角ぬの冤鬼の告ぐるると是彼共ぬ吻合も亦

何を疑ふべからざるはよく謀りて便宜を窺ひ老妖怪を退治して赤岩大村親
子の為めこの年来の冤を釋せし許諾一更もその甲斐なし。さかさま羽翼
を且角太郎の孝心篤く彼妖怪を妖怪と知らず真の親と疑ふ相譚敵
と難多し。おとどと吐ぬ胸の答て左の右の心からぬ旅宿の床の目睡も
せを在りけるを夜を深く深く随ふ頻りも睡眠を催せたる時睡らんと思ひ何の
程の目睡え起取するゆも身を放さぬ護身囊の中よりける彼信の字の瑞玉の
砕る如き音せし驚き覺て眼を開け枕邊より行燈の光を滅果て黒白の
護身囊を表より撈る玉の砕けしとて原素夢をわける状と思ふ
宵のうち騒げば心の安らざるを臥しけり尋思とて彼縁連赤が執念深
恨今宵竊ぬ害せし謀りて身添ふ玉の眞然と音と眠を
覺せし状の物と思ふより密と立出たて身起し衣を襲ふ縁頬の

障子を開く怪むべし障子の外方の物より並べ思ふねと走り出んとする
と死と探組とと思ふのうら此も騒ぎとて徐る臥草をかきて袂
包を腰に著け大小の両刀を腰に帯り掻撈々々又縁頬のくふと措きぬを
一箇箇音せぬや片上をよき出たる戸の閉鎖ありこれを一枚竊ぬ外へ遂に
前裁ぬ出くぬるふも足と捉せぬ為ぬ麻索を引渡して甲夜ぬ天の結陰
しを目前僅ぬ露るを八日の月の没い星光の現れ八聊便を
得る件の索とち論らるは彼此と見遠るふ南のさる板垣一枚の引戸を
せ。細小るのありてと究竟と鎖探捨て密と閑閑と試るぬ戸走り
このさるのさる手懸可閑措く又縁頬に立戻り障子引よき野の物を舊の似ぬ
倚る外ぬると雨戸をよき閉つ度面なる足場を揃る樹柱の蔭に身を
潜りぬる。現八が今宵の舉動と後ぬぐりの舌を振る身の中を瞻

有下といふの見る事なる。有如之程小刀三の鐘鍋々と響くを暗辨の音の近
 つ八箇の癡者奥のさす牙二郎飛伴太西のさす次の間より東太團五口
 濺太郎外面の縁連主従尾江内墓内さす三人兩戸の添ふ埋伏し八人
 三隊の立別出口々々を殺塞さす。競ひ鬼を諸声高く盜賊入りぬと撃手留
 よと叫ぶも果さ西方齊一隔の紙戸を蹴放ち閃く短鎗の刃頭横の
 上よと刺さ各々鬼の違ねども手會もせぬも。原來甲夜の計較を
 なく猶と逃るるん遠くつ追鬼と送め叫び罵る。會後さすと
 打擇しや縁頬より兎とさるの豫身方の倚り措く小桶播盆曰火
 盆の跌き倒と手所持て。刃の面を劈且人の短鎗と蹂躪し同上撃手をさす
 叫ぶの早も起も得さけり登時外面の後詰をさす縁連ハ敬馬さす。且
 縁頬へ登り来り狼狽騒ぐの共を頻り罵り鎮むる程の船虫への物音の

紙燭を秉り走り来り現八も逃亡すと告ぐ。希望を失ふのり。然
 ともと思ひかへて。ちと臥尊へ手首をさし入る。莞尔とらみ入々をさす
 試みむ。夜衣も蒲團も温まり。耗れ脱出く尚程のわづを裁龍の隈をみ
 躲とさるんも知るべからず。獵出ぬむと急ぐ。報る高声を兩戸のあふ
 停立る尾江内墓内ち告ぐ。ろろと逸足飛上り墓直を走。遠る度
 渡せ。麻索も兩人齊一足を捕らさす。齊一撲地と轉輾へ現八得たり。と頭れ出て
 起んとさる墓内。細頸丁と撃手落せ。尾江内怕驚さす。身を起し。声あり
 立く。偷見のこみ有り。来て撃手留ぬむと呼せも果さ現八も血刀うち
 振る。走り鬼と尾江内の脱とさると思ひえ。技合し。刃の電光両三合撃手
 よと見え。尾江内の肩先より。乳の下り。韓竹削ぬ。砍倒さる。樹下陰鮮血の
 丹楓を散けり。程のわづ。牙二郎飛伴太東太團五口と濺太郎或も短鎗打刀



応手物々々を引提ち振りおちる現八を推捕籠く撃んと競ふを物ともせざり
 勇士の大刀風向ふ前なる是首小見を彼首小隠とて一上一下と術を盡せ
 六口の刃の田毎の月の波のまわり小見如く何小暇なれり先小進
 飛伴太短鎗の煙卷斫落され刀を抜んとする程小現八透さど踏入て腕の
 尖骨を丁と破る刃の牙小飛伴太の苦と叫び倒さる身方の上を踏越り頻り
 進む濃太郎三尺小近き焼刀の稜うち鳴を奮撃突戦心をもち猛れども既小
 巨瘡を負ふ外足踏む腕も俱小素る繁芒吻と息をつ暇なく流るりの
 苔衣偶よろぞ大袈裟小破らましく仰及倒さる牙二郎東太團吾ホをいぢぢ
 深瘡を負ぬる既小身方と四人よで撃して初の勢小衰へ只三方小立塞を
 頻り小加勢を呼ぶ程小逸東太縁連ハ玄関小掛るける弓箭控拿客房なる
 縁頼小立頭とて弦音高く射かる征箭を現八を力りて斫拂ひ破落しる海

牙二郎オと挑争ふ必死の血戦此も怯まず前後左右小當且とも縁頼小
 船虫が箭種を多く拿りて来てよく縁連を資し射出は箭声小委まかく
 差詰引詰り切く殺せを現八も一叢茂き羅漢杉を盾めく幾もその箭を
 御きりく肚裏小ひらき。これ今やめて狗斃せ庚申出く亡魂小許諾するも
 その甲斐なく且年来五六士と契りく更も始ありて終るらんハ丈夫小あむと
 一びくを殺脱く武運と嘗は小増とてあつと深念と考ふ大刀を前をも受
 流し破落し棚々小遠巡して彼板垣の小門を引戸のほろ小近づ死く左の手
 頭を働く件小引戸を逆手小ひらて忽地破と用多し後さる小走し出くまかく
 その戸を引閉る外外面小大さる葛石のありく血刀投捨雙手とらけてまかく
 起せかの石を引戸へ楚と倚りくこれゆきと裡面をのり推續き追んとする
 推せども引けども戸のひらきバクバク何のうと焦燥の縁連さふ戸口小取衣をく

ふまび柄擇をりけり。有然程の現八を捨てる刀をさう揚て血を押し拭ひ替ふ飲めく。
 走り去らんとする程の曉の天をまび曇りて其知ともころぞ野干玉の路いと暗く
 身かば岐道ヨミキ外田の畔に投て往方を定めぬ。一か忽然と一團の陰火
 目前に燃出ぬ。先立立り現八を導くぞ隠々と閃きもく程の現八と互便を
 得て件の鬼燐を心當り返壁を投て走りけり。されば又牙二郎逸東太團
 吾東太ホを思ひけり。今小門を走り出する現八を透さぞ追んとするとも
 外面よりいと大きな石を倚り措と一か洞んとするその戸動を送ふ罵り
 推重す。戸尻に諸手を掛け諸声合して推と程の遂ふその戸を推
 外へ倒とかり。牙二郎石の小髻を磨傷す。要時ハ起も得ず。一人
 僉咄とち笑ふ向腹立ても今とふいひ争ん暇なけし。不稍身を起し塵うち
 拂き。且も不續けといふ俣ぬ。名現八を追蒐と縁連も亦後れどと走り

出する背後より。赤岩が若黨奴隷と笠山が従者小八船虫が指揮ふとるを
 後走ぬ走りたる主の後方引添へて喘々追ふ程の團吾東太の首を
 尚片息する激太郎と飛伴太を肩引被と且客房ちで退きける。かり程の
 牙二郎縁連と共侶敵の往方を認めぬ。とも足信して追ふ程の幾十町を
 走りけん天のちるく明くる。横雲の間よりして前面遙眺と現八を頻々
 走りて相距る七七八町誰が連城を照しけん踏も迷く返壁を庵の中に入り
 一か縁連見ぬ。歡びて今あの庵へ走り入りける。背影の疑ひもる現八も極ま
 彼知何との里中ん菴主とありてと問ふ。牙二郎含笑と彼知大村の
 野盡知て返壁と字せり。菴主ハ則て兄弟角太郎をその名と犬村ある里
 人ホが建てる庵と彼一のまを三遍もゆたてゑる。と既ぬ彼知へ追蒐て袋の
 物を取り易かり。ゆた左のえ右せんといと高き相譚ゆいよく歩をぞとあけ。

有然程不返壁る角太郎の雛衣と共侶不現八がうをの。いふくといひ
 不樂くその通宵寐も寝らば詰旦の未明の起る雛衣をいそぐ朝の炊の
 柴折焼くをさくその還るを俟ぬ僅ぬ想の出る比現八も喘々折戸推開けり
 まる為体の膝く衣ぬ鮮血の塗まじり縹のけいと驚き立ち夫婦を右
 よと左より犬飼ゆいふぞ彼奴の安危心のとる有けんうとゆふやといふ
 現八息吻あべ赤岩の宿所塾生們と試撃の趣且その怨を復さんと件
 徒黨九八名盗賊入りぬと呼りて現八を撃んとするその縹の為体勝負の進退
 如此々と言語急く報知らればある夫婦ハ又驚き且感嘆しく已ざりしを
 現八又報るや兵之定ぬ凶器ぬ戦ひの間是非及ばぬ某かの折二人を斫
 伏せ又二人の疾を負りて然ども大人一角殿ハその処出ぬと牙二郎ぬも恙か
 又上毛白井の来客ハ麓山逸東木縁連といふの原是塾生なりといへハ

主人も豫く相識ある人頻り矢を射るを某辛く防ぎ留めぬ箇様
 箇様不謀りて竟ぬ外面ハ脱出する路を未く走る程天結除りてゆてを
 ころむ時一團の烽火燃出某を導き天の明る比消失ぬこれらの由を
 報んとし立ちりてゆども程も追人蒐りてこの菴中を鬧まし其身を
 今さう惜む不足らぬ主人夫婦を連係せ後悔まとも及んや姑く餘毒を避て
 こそ又再會を料るべし暇やうまこのひさく立ちぬとてけるを角太郎も
 雛衣も慌忙推禁めぬ何事といふやうん刎頭の交りハ憂樂禍福を
 俱ぬアそせぬや赤岩より追人蒐りて家捜せんとし鬧くとも某かそのあうん
 限り阿容々々としてと遽とさや方便を盡してそがうへぬ脱れぬハ俱ぬ死ん
 要るにたる宜ひそと言語尖く怨むに雛衣も亦慰めぬ俺們夫婦の為とそ
 赴きぬ赤岩ぬとて寛をのひさくぬ萬死を出る一生を保ちぬ

八代傳七轉巻二

清泉堂藏

来多のしを又何処へ遣らるべしと申のめくゆのころ天のひほるよ
 夜と夫婦齊一禁むと現八只管感嘆と七余主人のいふまゝあつて
 俟ぬを伺ふと向ふを角太郎のせむせむと我間におも草庵ゆきこの俵在らへ無
 謀小似たり最窮屈のあつるべしと姑く戸棚へ躲き是是頼朝の伏木
 隠し漢の高祖の野中の井の敵を避るる例ぬをう誘とくといそがせ現八
 竟の推辞の由さく袂包を著る俵ぬ刀を引提身を起し家庵の鄰
 戸棚の中左手とりさうら登り角太郎も立ちあそく衣戸閉り追ふ人の
 のりもさると俵程の足然と走り著る赤岩牙二郎龍山縁連若黨奴
 隸を後ぬ立しと柴門窄しと入る呼門もせと縁類ぬ足踏みさうら登り
 角太郎の成刀を腰ぬ跨へ出迎へと云珠一牙二郎龍山氏と立て朝霧はけて
 多くと訪来らまへ故のあつと向ふ牙二郎冷笑と兄弟構ふ聞かぬも

親の勘當受へる兄貴ハ鄙語ぬ他人の權輿胡越の如く身ぬるを
 訪ぐ叶ぬ這回の緊要さく偷児を出し更といせぬぬ角太郎ハ其
 方へ膝を推向ところぬぬ死偷児呼り出せといさ覺ぬぬぬとい牙二郎
 項を伸し又阿々とら笑ひ否宜ある隠もある跟より人の来るとも
 ちでこの柴門を推開し裡面へ入りを遙ぬえと益ぬ死口を咄しより
 推しとと遮與ぬ異母でも兄弟の好まぬ阿爺へ勘當の勸解しと取
 する法もある強情張ら他人扱ひ用捨得せぬといふぬとと声高かつぬ
 謹問を縁連重妻時と推禁り角太郎ぬち對ひと絶と久し死犬村ぬ某
 這回當地ぬ来つる主君長尾殿の仰を禀し村兩丸ぬ相似る短刀の盤
 定を赤岩大人ぬ請ん為を推考し赤岩の宿所ぬ逗留ありぬ昨宵同所ぬ
 宿を討め旅客犬飼現ハが竊男と走り出るを某并小塾生達牙二郎

ぬと俱とも八名推捕おぼ箆へらく撃手うちとせり。彼現八かのげんぱちも手煨煉てびれゆ。某たがひが従者ともなり。
 をえりをえりのちのいぢりいぢり。塾生じゆせい飛伴ひばん太濃たぬ太郎たろうの深痕ふかあとを負おく。創きずままりこの
 故ゆゑ小現八おのげんぱちを撃漏うちり。遺恨いこんの堪たむ。牙が二郎にらうぬと共侶ともゆる。脱だつささと追蒐おひふ。
 天あまの明朝あした日の升ある。比廻ひまわり見みえ。現八げんぱちもこの菴中あみちゆうへ走はり入いり。罪つみあるのゆゑ
 舎やの藏事ざうじ東門とうもんの習俗しゆじやくゆる。是こゝも非ひも分わかり。佛ぶつを慈あや悲な善ぜん根こんををぬれ。今いま
 偷見ちゆうけん小荷擔せうかたんせるといふ佛ぶつの教けうあるををゆる。これらこれらの理義りぎを汲ひき。こゝに
 現八げんぱちを遽つひに異議いぎの賢けんが家搜けさうし。志しも捕とり。深念しんねんを
 決きめ。心こゝろと賺あざり。威いと老狸らうりツ穴あなある。牙が二郎にらうも返かへり。と焦燥せうさうなり。然しから
 けしる。角太郎かくたろうの騒さわぎ。氣色けしきもさ。菴山生あみやまのうゑの未歴みれき話説わだかまの虚実きよまを奈何いかん
 と考かんがへ。さげん。偷次ちゆうじ盜戒たうがいの世尊せそんの妙法めうぽう偷見ちゆうけんと知しる。舎やの藏ざうの出入しゆしゆつといふ
 とる。あつ。有あり。如ごとく者ものの件けんの現八げんぱちこの柴門しばいへ入いり。とる。脱路だつろする。野中のちゆうの

孤館こくわんある。天明ていめいの比ひる。何地なにちの死しえん。夢ゆめゆもあつ。又外またぐわいを索もとねぬ。
 といふ。標立ひょうたつ縁連えんれん牙が二郎にらう争まひ。あつ。その術ての喫くひ。論ろんする。證據しやうこ家搜けさうせん。
 誘立いりたつと共侶ともの奥おくへ進すすむ。ををゆる。引戻ひきかへして立塞たちさる。良人らうじんを伏ひする。
 離衣りゐの尻戸しりんどの尻しり手をてををゆる。その少すくし。白屋しろいの裏うらも返かへさぬ。下地壁げちへき
 凌しのぎ。夜寒よさむの床とこも良人らうじんの為ため。一城いちじやう擲なり。七しち足あしてもその人ひとのををららぬ。
 いう。志しある。角太郎かくたろう微笑ごうごす。離衣りゐ微妙めうめうく。ひける。よ禁よる。ふ無礼ぶれいを
 働はたらく。弟あにをを許ゆるす。事ことを好このむ。昨宵よくべの試撃しげき五人ごにん齊いっく。一撃いちげき手伏てふしられ。さ。
 志しを穴あな竊せうひ復ふたさん。世よの盜賊たうさくの悪名あくなを負おする。伎倆ぎりやうの浅あさ。あつ。ん。といふ。れ。
 駭おどり。縁連えんれん牙が二郎にらう敬馬けいばととる。此こゝも怯おそむ。向むかひ。落おちむ。語ことる。ふ落おちむ。試し
 撃げきの。つ。や。ぞ。知しる。を。ま。舎や藏ざうする。疑うひる。先踏さきふみ入いり。引ひき。出でる。者もの共背門ごうはいもんへ
 心こゝろをを示しす。双声しゆせい勢せいひ猛まく。ふ。び。進すすむ。を。角太郎かくたろう離衣りゐも亦また共侶ともの前まへの遮せり



八犬傳七解卷二

十三

角



八犬傳七解卷二

角

争ひ果るに折らう大人の来ませりも憚りて、要時穿鑿を覚えたり。願ふを
大人の勢ひのそ彼偷児をかり出さうと擲捕せぬらばあつ夫婦同類の罪ぞ
免る歎びあらんこの議を揣らせぬやと。且一角歎息して偷児のふり入り
認めりといふも證據なく又争ふも偷児を舎藏むといふも證據なく。角太郎を
いひ比よりこの離居よりありとも官府へ訴おうと遠絶志するのふあつねが
今も則ち日か見え角太郎か見えるとは、離衣も亦か見えさる疑ひの解らぬ
をかく愚老の教くそその弟言礼の違ふその舊友の義も補ふを無恥の
乗七罵り争ひ送ふ劍を削るふ及ぶ理ありといふも科免ます寔小疎忽と
いふものそ彼偷児の有無の愚老が代りて穿鑿せん別小所要もあるれば龍山生
赤岩の宿所へ退りて俟ぬ人噫無益やと咳けり。角太郎この殘條小寔められ、再
得ぬおあつ、傍と見え久し縁連羨する面色也。老先生の教論の趣感心少

か、ねども何とあらん角太郎の貝負せぬらば、某安心仕らず彼短刀の
紛失ある小偷児も捕らぬと、還らば主君の咎めぬらんこの義を憐れぬやと
いふを舩虫うち消し、そのそ天の膺子小飲りてのるれば、身あつ且と
謀るあつと、赤岩へ退き、吉左右と俟ぬやと諭せ、縁連推辭自由を命じ、
貴教小従ひあつ、某はと退き、某はと件の一議と憑き奉ると期と推して
一角夫婦、角二郎小別を告ぐ、外面へ出て従者をいそぐらぬと縁連一町あつり
従者ホと見え、箇様々と其は、従者ホと見え、ろと得くそ、俣小立別れ
は、赤岩のふ趣くを縁連、要時目送り、むら、竊よ立かへり、庵の庭る。
袖襻の蔭小躲る狐疑邪猜裡面のやをぞ窺ひける。

第六十五回

媳み逼り一角胎を求む
腹を劈き雛衣鱗を仆せ

そのとらむのいづく。くくくうふうふう。呼びつ。登時赤岩一角の角太郎夫婦と呼近づけ。いんとう。且くいふ。おんむも歎息の
 貌をかくる。改めくやをま。角太郎離衣もなぬ。麒麟も老て。怒馬も及ぶ。賢達
 子共の目の老老の死と見え。今さらふ。又いふ。あはれ。宿所を出て。遂に
 此の情由ありと。離衣の離別せ。れ角太郎も亦親を恨む。宿所を出て。遂に
 還す。親甲斐も。呼久さん。有敷。か。光陰を過せ。小船虫が
 折々の義理。あり子と。うら。歎く。か。勧解る。を。せ。くも。不。樂。く。て。い。う。ふ。せ。ま。と。い。ふ
 程。昨宵。宵。山。逸。東。太。ホ。ク。旅。客。大。飼。現。八。と。試。撃。の。勝。負。小。然。を。合。て。年
 ころけ。血。氣。小。慄。る。牙。二。郎。又。小。その。う。て。撃。捕。と。し。れ。も。還。く。現。八。小。殺
 立。れ。く。瘡。と。負。へ。る。の。死。せ。り。の。三。四。名。小。及。び。り。然。る。を。小。懲。む。小。現。八。を
 追。蒐。ま。ら。之。来。つ。る。と。せ。え。く。か。こ。親。子。對。面。の。便。宜。を。し。り。と。い。ふ。か。ど。り。て
 病。苦。小。勝。る。轎。子。と。昇。走。り。て。船。虫。共。侶。こ。え。来。つ。る。小。逸。東。太。ホ。と。驚。か。て。無。異。を

計らんと。おののけ。あう。うら。被。現。八。を。盜。賊。なり。む。を。盜。賊。と。呼。做。せ。ハ
 逸。東。太。が。所。為。る。と。牙。二。郎。ハ。悟。ら。ぬ。渠。が。為。小。兄。を。誣。る。寔。か。嗚。呼。の。白。物。之
 有。如。之。者。縦。現。八。を。舍。藏。さ。す。と。も。け。く。あ。赤。練。の。こ。ろ。を。ら。れ。り。こ。を
 くる。こ。で。き。の。小。亦。船。虫。が。神。詣。せ。不。か。こ。和。殿。夫。婦。と。諭。し。て。一。処。小。あ。り。と
 せ。え。く。歡。む。い。も。ね。く。親。の。心。を。子。の。あ。る。壁。言。喻。を。身。小。撞。く。親。を。親
 と。い。ひ。ま。さ。れ。何。を。足。ら。ざ。と。よ。き。老。て。小。登。り。も。憑。ま。す。假。の。す。の。世。よ
 多。く。も。あ。ぬ。西。箇。の。子。共。と。持。た。り。一。箇。ハ。不。和。の。板。廂。月。の。影。り。漏。易。死。袖。の
 雨。を。苦。け。れ。離。衣。も。あ。り。得。く。夫。婦。旦。暮。睦。く。孫。共。夥。産。出。と。い。甘。く。え
 ぞ。孝。行。る。と。こ。の。意。を。あ。づ。く。告。ん。と。き。来。つ。る。を。哀。ま。と。い。ふ。や。夫。婦。の。心。甚。麼
 か。い。ふ。ぞ。と。元。彼。よ。言。向。小。親。の。目。ぐ。小。似。け。る。折。ま。す。愛。小。死。深。雪。の。竹。の
 子。と。い。と。惜。む。思。愛。の。情。義。小。感。ま。る。角。太。郎。ハ。且。怕。と。且。歡。む。額。つ。死。す。頭。を

擡げぬふ餘るん慈愛のかくあべと知らざりし不孝の罪を省ぬまへん
 奉るものかあの一異義別奉りて勸解奉らんとせざるわづかる住ひ
 みる親の罰めあうんと必ひのそ然と親と疎畧せざりし彼この情由
 彼情由とせりし解が今さう身非と飾るふ似てんのも又何をせらるん
 當とふ免ぬるや又粉骨碎身して命と共に事へらるん離衣の款び受と
 等閑ふ仕へらるんと必ねどもよめ心は死るんか身邊侍りし折孝行ら
 したるものもあらざるを替めぬ妙小優し死ん寵との心言葉めせぬ
 天おそろし侍るん澤の摩訶陀の水の月届ぬるん我遍のゆら隈るん
 らせぬこの身の為ぬるん水と火と成せ仰もいそ背きゆるんやとそ夫
 婦齊一向對の歡び氣色ぬ見まると船虫とそと合笑とけふといふ月まの

吾俯が願ひのゆるひと日ごろ和さぬやうに心の底ハ骨肉の誠をこま
 頭とて現争まぬのゆるん見牙二郎も身の非とあらけり心改めて家兄を敬ひ
 らうとや童でるたのどとのひのわつとちち笑ハ牙二郎の頭を擡ハ角太郎小
 うち對ひて異義別奉りて縁連ぬ嘴略と飼とて大く不敬を仕へぬ許さぬとち勸解
 角太郎歎びて日と周公の聖なるねハ和殿ハ管叔の悪もる一兄弟土心を
 此とあつと親と事へらるん願ひゆとのふ一角笑ハげぬ既親親子兄
 弟夫婦一家和合の時來ぬとそ歡びの皿せん轎子の中は齎せし偏提ある
 餅の塩物ハ棘籬一種漆られり一角ハ皿をこれと召ととり揚ぐ今朝ハ未明の
 事されハ肴の準備整ふと餅ハ即二親又棘籬ハ數の子をかをる愛と死
 物ハ然る角太郎酌んせとそ傾け取らるる角太郎ハ膝行頓首

飲むとも立地は疼痛去く七日のくその疾愈ん只又るよははるのよと
 ひと云ふらうとも獲るは某利されは姑く誤捨さぬまのふ不測の彼木天夢の
 百年のまう土の中埋まけんらるる良材既まもぬ入らぬ且試み細末あり
 昨宵もよく用のが曉さぬ疼痛を覚む痛も大く乾きうける経験のある
 られば況くその餘の三種を加味し用ひて眼の故のどくぬるる絶疑ひ
 らたのめ親の為め命も惜ずとの孝行は甘へ頼む某種の調達む
 平の貞盛ぬその身の病痾の良薬はその子の娘の胎内の子を求む例も
 ありこのる今昔といふ草子ぬえと曩まぬ人のいふを不仁の所行と
 ぬひさるもけのくさうらぬ娘のうぬるけることと能く孝あり子共る
 のふともいふで兼引へた推辞せとと豫くよりぬいぬ不便ぬとといひ
 虚泪をぬぬぬ子船虫鼻うちぬぬ喃角太郎は難衣は凡生と捨る物

惜ぬ例のるはその胎内の子も母も爹々公の病痾の良薬ぬるよはる孝
 行節義共四孝と名ぬぬ唐山人も及んや甚麼る過世の業被ぬて親子と
 生は娘とさうけん痛すゆちと声立くぬる口説が牙二郎も目をあてて喃
 母公さぬ大くか泣ぬぬその小の虫を殺とも大の虫を助けよとの諺もあるが
 兄貴も嫂心もよ諦めと歡ぐそぬぬを泣立ぬるが卻も心弱くさぬぬ死
 涙を飲めぬぬと慰めぬぬ船虫の頻にぬぬ臉を押拭ぬ親子三人の虚悲嘆ま
 窮らる角太郎の頭を低手と又き且く心をせぬを天も仰ぎぬ教回
 嗟嘆ま声と曇らと推辞も由る死大人の御所望只某が人のくるが身を八
 割にせるとも惜むぬぬぬも難衣のうが養家の嫡女持ぬ義理ある妻
 らるは懐胎もも定まらず尚血塊の類もその功もる狗死るんその義の
 許さぬとと推辞を二角ぬぬぬを眼を瞑し声あり立ぬぬぬぬ角太郎

親の爲は何事と背トとのひ一その座もあつて時も殺らぬ今の間ふ許諾
 るを忘る飲と敦固猛く詰らる角太郎の驛を進めその義を忘るひのども
 仰るふる死の飲一旦傷まらぬ目の葉子媳と孫とを殺しぬ誰う不仁と
 仰る死且離衣が懐胎の糸を否や定まらぬその腹を今鼓と懐胎なり
 まる不仁の後悔其甲斐あつてと父争ふ子あつて死にその身不義の陥ら
 ざとの聖の教ものなや禁めらるる親の爲賢慮を仰ぎ奉るといふ一角
 まて怒りて一言いふ一言返して青標紙を引く博士良さまと不孝の心よを
 親を欺く當座の誓言みづから破る妻との惜まらぬ又何ぞいふ今良禁の
 有る目之病愈むる左手の敵を今と竟し稱むる武術の足る大く劣る
 長生を恥しと鄙語をひ合へり今面りふ自殺しと汝も夫婦の心を
 休んてとひのひと衣領推ひまら脇挿の刃と抜んとする程は吐嗟と駭く

角太郎が禁るをちて船虫牙二郎も左右より携着く刀を奪ふる
 船虫の恨むる角太郎をつらりと賽孝行の剥易く醫師の正し懐胎
 ぞとのひとより離衣を一旦離別する今と又懐胎の定まらぬ
 と欺る現口を世の中朝勝るものなりとて親を死ともめん身は何
 とも思ふ心つらと怨むる牙二郎も亦声を苛立ち兄貴の孝子といふも
 嫂の貞女といふも今この答一箇あり尻口でのひのひとより思ひきてまらぬ
 ぞとせり嘯立られ弱り果る角太郎のひらひらと黙然たる良人の心を
 思ひ及び離衣の初より涙へと涙の苦一死胸の塞がそのひのひとより
 され只伏沈むるをを思ひ絶えぬ涙を飲り頭を擡て喃る所天
 あれ程も子実をさるや妾が有身する飲否を定ふせれども竟も脱とぬ
 定業ぞと覚期究む侍るか身覚る中腕の病痾過り光陰共侶の

かゝ腫張うと申ゆれば疑うも無理なるも多々公の為小今この中院を割も髪
 きもせしと内物物の有るを定ふ知られず濡衣を乾せしむる蜻蛉の
 命をいふ惜むる本故まじりて多々も悲死天見つ山の山雞の峯上
 痛くも明一泣暮らさるる願ひ慙々妹と伎の二処に住むる昨け別と
 後の憂事を黄楊の小櫛の告る向る死せしむるうんとひけき黒髪
 神をぬ身ぞ是非もあらぬ欲きまゝのひ盡さぬ言の葉の春ゆめあり
 花用を身の身果の哀とを浮世の秋の露もれ離の菊のさく毎ふゆひ
 出さぬひさびさ一遍の手向草受の待ん後の世の蓮の墓法の雲半座を以て
 侍る一願くも百年の命を名をも揚家と起と孝と義の人の鑑と身
 死く采あるこの身の幸ひと殺ぬ身と身を衝つ烈女の魂俾くんえと
 目み餘る涙を遺る顔もまける角太郎はとと使つ眼色をまらさき離衣

微妙き覺期とともかくも脱と死命運とんと久も身身の親のこが
 養父只一とりの縁ふわを養父へ則か伯父幼稚き時より字育は文
 学武藝何れとる教導き人となり只一箇の愛女を妻せし供恩を實
 父の為といひさぐる仇も復さ人といふやこれ一切せぬわとと推辞と立も
 難うと離衣は近の近く小宣公妻をの惜むといふは公の喃母御前
 牙二郎ぬい甲斐もさるる所天子任と時を殺さるるそ手ぬきと養々
 公の菜の所用お立さきぬと余余願く船虫牙二郎虚々死目を押しひく噫
 めげう雄々た孝烈のと痛く哀死を又俺們的に今さう刃を當られ
 喃母所天家尊の大人い相謀るやと問ふ一角含笑と適愛と死孝女
 郷示せし木天蓼丸の鞋へ推き末と大抵用ひ盡しこれ真木柄の
 わり便是良削るは秘藏と携来とこの短刀をぬ離衣の自殺を勧めよ

如右まると死○おがうらめ自業自滅○おのゝりといふく○おのゝりの娘を害○がひを誅○せりむる妻を殺○ころを恨○うらこむ
 わくドモヤ○おこの意を得○かさすといひつ懐○か子○こを入○いれとて出○いせ短○たん刀○とうの異○い詮○せん合○ご
 せ○せ依○よるをい○いご○ごとくやをう○う寄○よせれば船○ふね虫○むし鮎○あじと受○うてて離○り衣○いが身○み邊○へみ措○さけ
 喃○なん媳○てい御○ご前○ぜん杖○じやうの下○した立○たつ振○ふ子○この打○うてく○く親○おや心○こころおん身○みの覺○さ期○きの健○けん氣○きさふ誰○たれとて當○あん
 刃○やいばのう○うて自殺○じざくを勸○すすめよとある○ある々々公○こうの仰○おほせ黙○もく止○とまてこの短○たん刀○とうを○をお○おも○も心○こころあ○あふ
 臨○りん終○しゆうの弥○や陀○だの名○な彌○や肝○かん要○やうる○るんと虚○こ位○ゐの説○せ示○しせ○せ離○り衣○いの短○たん刀○とうを○を場○ばう○うち戴○たい冠○かん
 脆○もろき女○にの腕○うでぬ○ぬ潔○けつく死○しを遂○ついん○んと心○こころの○のとく○とく信○しんじても然○しかり○りとく○とく妾○めかけも武士○ぶしの妻○つま武○ぶ
 士○しの女○に児○こ子○こ生○なま○ま甲○か斐○ひ子○こ後○ご且○かつ下○くだとそ○その○の侍○しやくと○と々々公○こう母○ぼ御○ご前○ぜん下○くだら○ら世○よを松○まつ竹○たけと
 共○とも侶○りよぬ御○ご壽○じゆ命○めい長○ながく○くと○と名○な残○ざんの盡○じんぬ○ぬ天○てんの○の火○ひの○の御○ご前○ぜん下○くだら○ら世○よを松○まつ竹○たけと
 わくまう○まう死○しるを猜○そしめ○めてさ○さぶ○ぶと○とむ○む枝○えだ放○はなり○り刃○やいばの光○ひかりや○や角○かく太郎○たうらうの○のさ○さと○と膝○ひざを
 推○お向○むかへ○へら○ら目○め成○なま○ま不○ふ降○かり○り膝○ひざ子○こ涙○なみだの玉○たまわれ宵○よの板○いた屋○やの妻○つま夫○ふ送○おくぬ顔○かほを足○あし

あれ○あれて共○とも小○こ無○む言○ごんの告○こ別○べつを○をく○くせ○せま○まや○やと○と角○かくが焦○あせ燥○そう声○こゑの眞○ま官○くわんの使○つかみ○み阿○あ鼻○び
 泥○どろ外○がわの弘○ひろ言○ごんの船○ふね虫○むしも牙○が二○に郎○らうも亦○またと○と死○し天○てんを促○すすめ無○む常○じやうの首○くび途○と後○ごと○とせ○せど
 離○り衣○いが○が握○にぎ持○もちの○の指○さしの○の間○まぬ○ぬ晃○あやと○と刃○やいばの電○でん光○くわう刀○とう尖○せん深○しんく乳○ちちの下○したへ○へと○と衝○つ立○たと○と引○ひ
 繞○まわら○らせ○せ颯○さつと○と漬○ひる鮮○あま血○ちと共○ともの頭○あたまと○と出○いる○る一○ひと箇○かの靈○れい玉○ぎよく勢○せいひ○ひさ○さる○る鳥○とり銃○じゆうの火○ひ蓋○がいを切○きて
 放○はなせ○せ知○ちく前○まへ面○めん半○はんと○と角○かくが鳩○とよ尾○び骨○ぼね礮○ぱうと打○う碎○くだけ○け苦○くると○と聲○こゑ叫○こゑび○び果○はれ○れ手○て足○あしを
 張○はる○るを○を仆○ふし○しける○ける緯○いの不○ふ測○そくぬ船○ふね虫○むし牙○が二○に郎○らう驚○おどき○きる○る見○みえ○えと○とて○て天○てんの○の敷○しき○きと
 ぬ○ぬぬ○ぬ大○だい人○にんの○の緯○い絶○つ絶○つぬ○ぬ軟○か悖○はい逆○ぎやく不○ふ孝○かうの角○かく太○た郎○らう妻○つま離○り衣○いと○と謀○ぼうし○し合○あは○は親○おやを害○がひ
 する人○ひと面○めん獸○じゆう心○こころ其○その知○ちる○る動○うごき○きを○を呼○よび○びと○と敷○しき○きんと進○すすむ○む牙○が二○に郎○らうを資○すけと○と引○ひ添○そぬ○ぬ船○ふね虫○むしの
 等○らと○と懐○か劍○けん技○ぎ肉○にくう○うと面○めんを振○ふる○る殺○ころす○す菓○くわと○と角○かく太○た郎○らうの○の戒○かい刀○とうを○を握○にぎる○ると○と握○にぎ持○もちと
 受○う流○りゅうし○しら○ら拂○はらひ○ひ慄○おそと○とあ○ある○るい○いの○のわ○わり○り某○な夫○ふ婦○ふい○いふ○ふと○と親○おやを害○がひぬ○ぬ悪○あく心○こころあ○あん○んや○や
 等○らと○と禁○かぎり○りても○も些○ちも○も聽○きぬ○ぬ無○む法○ぽうの○の大○だい分○ぶん風○ふう禦○ごの○のと○とる○る角○かく太○た郎○らうの○の右○みぎの○の臂○うでと○と寸○すん許○こ

かまう 痲負の右の柱え左の當る期の重厄最も危く見え折る戸棚の紙戸の
 間より打出た銃鏡子牙二郎の乳の下三寸背腐くやまよち串まき叫苦と叫声と
 共小刀と捨てる仕掛け程もあせり現八も食戸破と蹴放ち棚より墮と飛下
 且船虫の驚駭驟と進人と身を逃すも現八も走懸て利手を捕て引
 被ぎ向ふふ投へ船虫の火盆の積小膳を大く打惱まきと灰塗まき倒しけり
 角太郎この為体且駭まき且怒り無益大飼現八人も頼ぬ助大刀のれを不
 孝不陷さえ為れれ豈弟と継母を害と身を脱るのらんや交遊の義も親
 族の死心易易とて勝勝負を決せよと敦固猛く名告り戒刀晃りと引抜そ
 撃投捨てる揚る刃の下と現八も撥溜り捕笛る角太郎が二の腕を流る鮮
 血を乞と見え遠く懐くを出せ觸體小雷る鮮血の吸入如く塗着て尾の尻
 水小等々只一滴も觸體する下小溢る親子の明証奇特小勇現八も怒る

声とあり立ち慄とある大村め打仆さ下一角の御邊の真の親をまこの觸
 體を真の亡父赤岩一角武遠大人の白骨をさるるや今面を骨と血と
 ひたふ疑り親子の徴据告げたるの言も小怒を刃と俱小斂めよくせれよと
 突放せ角太郎の柄押空く由断せまらるるご一犬飼め彼知小付まらるる父を父
 布く膝小戒刀の柄押空く由断せまらるるご一犬飼め彼知小付まらるる父を父
 るまどこのるるのいうる所以せはまきと問へ現八歎息と儻稀る孝子
 烈女も妖怪の為は欺まきとるも累る厄難小離衣どの自殺より腹の中も
 頭まける彼靈玉小假一角の繫小付され天の冥罰彼りの御邊の父をねば牙
 二郎も亦弟めあまど迺妖怪の胤小して船虫の妖怪小列添小妻といふはの三線
 来歴一朝小盡まきとるねも般茶きを甚く所要を摘ん抑一昨晡時小其茶網
 亭を過ると里の茶店小憩ひ茶店のあつ鴨平が向むがら御邊親子の



噂を大抵使ぬりかき茶店を走り出く神子内のあるる山頼村を投ぐ
程の途に日暮て天の俄頃結曇る路次迷ふ其如とも
ね行死なぬるぞと申山ありといふ胎内實の遠未けり網を
よと携し弓と箭を身の護りて一夜を曉を程の刃三やと比東の
より勿然と怪死の近は死すその本體をえん為弓箭手控老
松小攀登りて窺ふその面猫類せる異人野裝束し馬無るその馬も
亦異形ぬり自然木の木馬の如し左右小從の從者も夜叉も似りけ
彼馬上の怪物の眼光りて四下を照らさぬ其便りを得り弓箭刺て
固め標と發て心む彼怪物の大將の左の眼ふ丁と立窮所を堪ぬ
け馬より墜と落けるを杖の雨箇の怪物ホが傷者と肩引被り何地も
二件の怪物が等類を駈催し來るこあふ當りかんと尋思す

樹杪を下りて庚申山小攀登り第二の石橋を渡り果て前路山岩窟あり
その中いと大なる窟の中火を焼くある異人の某を呼近づくと不測の値偶を
歡せぬ語次小某は彼妖怪の事と告ぐその本性を語りその人答く馬上
より妖怪はむうよりこの山の麓小棲る山猫又相從若黨二人山の神と
土地神へ通方山猫及び神も彼怪物の駈捕し扈從せり實小歸伏
せりぬるぬるその瘻を負ひを幸ひぬ杖掖つ逃亡すとの他雨箇の從
類ありその老と猫と猫と此ののども從ひ來る仇を復さんとを揣らる又
彼馬小精へも亦山猫の猛き勢ひ威服せられ役使すのふる件の猫は
この年来當國赤岩の郷土より赤岩角武遠が形貌小変り併し今も
彼村小在りさるこの山を景暴して折々夜半小來遊ぶ今宵眼を射られも遊
山の餘念をば入渠の神通無量より十里の外のと知り然るを今宵眼前

和殿を知て疾を員ひふすも不用意に依てと緯詳小告られ某頼り不駭嘆
 亡魂の假小見と出する今茲より十のり六七年の冬十月の比より某茂
 起さるうありて昔より人のかゝぬ庚申山登らんと門人總三四名を將て未明
 りの登陟する程第二の石橋の邊に至り怖まると渡るのぬこの故小某一人
 橋を渡りてこの岩崖の邊に来り時山風猛り勢りて沙石を眼を撲りて弓投
 捨る目を拭ひし後小窺ふ件の山猫驚直走り鬼を引倒さんとする程
 腰刀を引抜き吭を刺んとしれども腕狂く山猫の前足を劈り浅瘡を
 物もせず勢ひ籠ぐ某が吭を咬著りて要時めめて緯断して死骸を岩
 崖に引入れ穴を咬ひ骨を遺し馳る某が衣裳を被り某が大刀を佩き相
 貌言語進止せり某が似る変れ如此如此と欺詐す次の日赤岩小

か了来ぬれば門人里人いふさう後妻窓井を欺まると一室も疑ふのり
 かくその次の年窓井が腹小男児産まると牙二郎と名つけり是よりして假一角ハ
 某が兄の角太郎を憎むと甚しく日毎の呵責相断せし外伯父をける大
 村の郷土大村蟹守儀清夫婦角太郎を憐れ養ひて教導き近曾獨
 女なる離衣をりて妻をり是より先小後妻窓井ハ妖邪小精氣を吸耗して病
 亡久しきまると言ふる假一角ハ嬖妾をのり物に近曾来る嬖妾の
 船虫といふのを後妻小執立り彼船虫ハ心なる邪智奸悪の淫婦なれば同氣なる
 ら相求るゆ妖邪小觸るる恙る又大村を蟹守夫婦ハち續き世を逝り
 一六遺財田園を利せし為小船虫が欺詐す角太夫婦を召さつ箇様々の口舌
 起す離衣ハ離別せし角太郎も亦追出さす今ハ返壁る庵小あり假一角ハ
 幾回と角太郎を害せしと怨むと大なるねど角太郎ハ身を護る礼字自主の靈

玉あり身ふ又如此々々の悲之わまは僅小害を脱るのそその危きと雞蛋を更な
 うる小異ちまむ和殿返壁小赴きく角太郎小對面して渠を資けて日る為小假一角
 小を撃果して室を雪もあうといも哀れ頼まし其感涙方もち御邊か
 まる靈あまの枕より立夢も見えく縁の趣云云とてその子小告さまると詰まふ
 ければ尊父の靈魂いと恥る面色あてされどよそのうられ後妻窓井が在り比るま如右
 夢あふ告るともいづる實更と必死只疑ひを起そのそ彼ホもいよく危うか
 と深念をり黙止う和殿返壁小赴きく角太郎小對面するともいまたのちを
 且く筒様々々小談一ぬ真偽あうと頭もと死角太郎が迷ひを解くは
 短刀ありこれに是當初彼山猫が畧遺まこの岩崖へ残し置る某が短刀あり
 りて今小秘藏せり多れも角太郎この短刀を認めるとるをも疑ひ解くは

觸體まふあは彼が鮮血をこれ瀧が親子の微据分明るらん只願憑むとか死口
 説く觸體と短刀を遞与されりかくその曉立別れとて死靈魂四言十四句の
 識詞を吟しと示されり某記憶表されどもその折必鮮しはるるを今さあべ的
 如く當らむといふとるこれ其の詞小相遭講武相別誘仇といふ起句あり是
 則きの某へ訪来て御邊と武更を討論し介后又某は赤岩へ赴きしを牙二郎船
 虫假一角を追ひつて来るといふ又その次小越全露玉菊花謝秋といふ両句ハ雞
 衣あををいへ露玉ハ則礼字の灵玉烈女これを全と謝秋ハその死をいふ又その
 次は再阮不釋更問觸體といふ二句あり是目今のふとて小主客の再阮も觸
 體よりて安らむ又その次小妖邪亡處申山心遊といふ兩句あり是此假一角の山
 猫亡びて庚申山小妖邪絶つ是より衆人登山を述べ又その次小八大具足八大
 未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終歸一流といふ六句あり

其の告ぐる義兄弟犬塚大川犬山犬田犬江ホ五犬の人人御邊と甘木と俱ぬ七名皆
 是安房の里見殿の因縁あるをいへり。其の濫觴を原る小里見殿の息女伏姫君一三の
 信を失ふと、八房といふ大御俱して富山の奥入りあり。彼犬の氣を感じて腹を
 よろめるあひを懐胎めよといひ愁ひて自殺せんと覺期の折里見の忠臣金碗大
 輔彼八房を撃ち死せし鳥銃の鉄丸抜く姫も病を負ひあひあつらふ刃伏一
 ぬひその瘡口を白氣升りて八方へ散乱し且役行者も感得せられ水晶の
 数珠の数々の大王八箇も共散乱して往方とあつて件玉の仁義礼智忠信
 孝悌の八箇の文字の自然見ゆるのふるか。金碗生れ出家の件の玉を索ん
 とく抖擻行脚十年を歴り加旃里見の家臣蛭崎十一郎照文も主君の密
 意を禀奉りて金碗入道の迹を慕ひ智勇の賢士を募らん為る。諸國を
 遊歴し金碗、大法師と共に下總を行徳旅宿せし折某ホゆりて大

照文の對面し里見殿の因縁ある趣を感悟せり。その因縁をいふゆゑに俺們
 七名幼稚き時より仁義礼忠信孝悌の文字あつた。灵玉を感得せり。便是
 件の数珠の数々の玉の文字よりて分明に又只是の玉を感得せり。吾黨七名の
 各々その身の中牡丹小似る痣ある。彼八房の犬の毛色小類せを知るべし。有如
 之者各々親のありとも皆伏姫のめし子小等。一晝義安房へ伴んを照文の勸めけし。ど
 八の具足せられ推辞くその議に従ひ折る不慮の厄難起りて大江親兵衛の
 往方と知れぬ。犬塚大田某ホハ、大照文の相別して大川莊助と共侶の上毛の荒芽
 山に至りて死彼処の亦災害起りて犬山犬塚大田犬川の四大士小別れ。六索
 巡りてこの地に至りてか。智字の玉をりて一大士小別れ。いも遇ふとを得ざるを
 して八犬未周と彼詞句を示され。八犬具足して安房に至りて里見家小
 仕るよりと示さん。南總雖遠終歸一流の向あり。因縁の如くされば彼靈

魂の頼るも其既御邊とて犬士の一人を知らざるを死力を竭さんと
 縊の及及入るる山猫の通力自由を得ての彼玉玉の怖る故年
 来御邊を害するを以て且昨宵弟子が某と試撃せし折その身病痾假
 托某と試撃せし夜深又彼悪棍ホが某を害せんと折假一角出づりも
 懐中の信字の玉玉の怖るる然れども難衣の吞る玉の腹中なるを
 の知る懐胎の胎内の子を求るその玉玉の撲けられ是天罰の
 時即到来その数々め喝するんれらるる又縁連が携来する短刀柄も
 鞋も木天夢夢のわりの假一角が竊る某刑の用ひる某と賊と誣り木天
 夢夢の猫の好むの薄荷銅枚子の粉と共究めてこれ妙某然るを
 師の云云といふの虚言を山猫と唱るの又是一種の妖獣め人家の猫と
 同く其の小犬大の猛き虎の似る深山の早の好んで人家の小児を

竊る嘆ふとありと况数百歳を歴するの通力変化さそのゆめか
 怪の腕婦人の驚死され御邊夫婦の孝友貞烈人の捷と其徳その義を神明佛
 院の懺助は仇を復さるるん恰といひ唯痛死の難衣とんその心操
 賢人の行心もるるを良人よ添ふ日の長うそ非命の終るる唯薄命といふ
 名を揚げ良人を次負ける貞烈末世の傳ふ及亦洪運といふ先扶禍福の
 糾の繩の如し誰か奇伏を前知を死抑を直らの趣を初り吉言も御邊の信
 かろんと彼妖怪も知しと彼のやせんといふ今を遺与を尊父の短刀
 觸時と俱く受納りぬるといひみく像見の兩種とて後且角太郎の愕然と切て
 夢の覚るごとく且驚き且恥く處り戒刀の聲も揚ぐ斂るる手首を
 まる感涙さるる泉の如く胸を拍胸を拍く懐舊悲歎の堪ざりけり

里見八犬傳第七輯卷之二 終

八犬傳二冊卷二

清泉堂藏

